

もっと知りたい

ふるさと

37

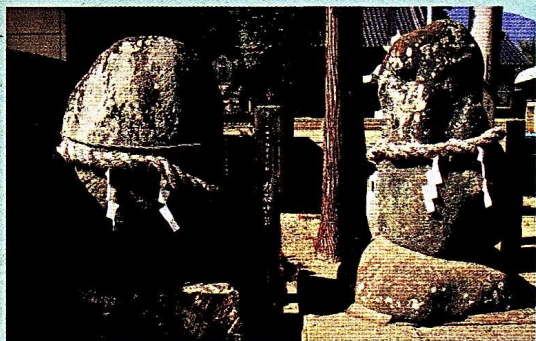
「力石」って いろいろな歴史がある

◎善光寺平の稲作は力石から始まった？

力石には、弥生時代の始め（約二千年二百年前）から人々が生活していたようです。

これは、主要地方道長野上田線の「力石バイパス」建設事業に伴い、二〇〇一年から七年をかけて、道路用地となる場所を「長野県埋蔵文化財センター」が発掘調査してわかったものです。

中でもこの調査によって注目されたのは、弥生時代前期末〜中期中葉の墓跡と弥生時代後期の集落跡が確認された



清水神社にある「力石さま」

ことです。

墓跡の中からは、焼けた骨や副葬品と思われるものが完全な形の壺などとともに発掘されています。土器の中には、地元で作られたものに混じって東海地方で作られたと思われる物も発見されています。

このようなことから、この地方の米作りの技術が弥生時代の初期に力石に伝わっていたことが認められます。そして、稲作が徐々に長野盆地（善光寺平）に広がっていったことが想像されます。

◎「力石」という地名の由来は？

力石地区の中心からやや北寄りに「清水神社」という社があります。その参道入り口付近に大きな二つの石が祀ってあります。この石は、千曲市の文化財にも指定されている「力石さま」です。

千曲川の洪水が運んだと思われるこの巨大な石が「力石」という地名の誕生にも大きなかわりをもっています。里人が力の強さを競い合ったり、

古代から巨石を崇拝する信仰をもっていたりしたことにより「力石」という地名が生まれたものと思われれます。

その年代は定かではありませんが、安土桃山時代（一五〇〇年代後半）村上氏の一族である村上成国が村上郷出浦に分地して出浦氏を称し、三郎藏人重義が同郷力石に分地して「力石」を称したとされています。

ところで、「力石」という石は全国に一万四〇〇〇個あるそうで、現在も「ちから石」による力試しは全国の約十か所で行われているといわれています。しかし、「力石」という地名は、高知県の津野町にある力石と当地の二か所だけです。

◎力石は「田舎の江戸」と呼ばれていた

力石は小さい面積ながら肥沃な土地に恵まれ、文化文政時代から養蚕業が盛んになり、農業以外の商売をする人も数多くいたことがわかります。

資料によると、繭の仲買人



平成 25 年 1 月に発行した冊子

はもとより蚕種売から木工・鉄工・建設業者・質屋・油絞り・漁業者・酒造り・髪結いなど二七種もあつたと記録されています。明治になつてもそのまま繁栄が続き、多くの商店も出来、繁昌していたと思われれます。事実、終戦の昭和二十年頃までは近隣の村々からも大勢の人々が買い物に訪れ、本場に何でも間に合う便利な村として賑わっていたことが伺われます。こんなことから「田舎の江戸」と呼ばれていたものと思われれます。

◎新時代に対応できる力石に
力石は、上山田地区の南に位置する小さな地域ですが、先人たちが築いてきた気質は今も生きております。自分のふるさとに誇りと愛着を持ち、この歴史や文化を次の時代に受け継いでいかなければならないと思ひます。

「力石を語る会」 望月照一